大分県立芸術文化短期大学研究紀要　第37巻（1999年）

マナエイとファニュエル
—『ヘロディアス』の創造性をめぐって—

La Création des Personnages de Mannaëi et de Phanuel dans *Hérodias*

大　橋　絵　理
Eri Ohashi

『聖書』のエピソードをもとにしていることから，『ヘロディアス』のヘロディアス，その夫のヘロド，娘のサロメ，エリヤのヨカナンは聖書のなかの登場人物でもある。さらにヘロドの城を訪れるシリアの総督ヴィテリウスと息子アウルスは歴史上の人物であり[1]，『ヘロディアス』は『聖書』と歴史とを混合させた作品であるといえる。また作品に現われるその他の様々な民族も当時じっさい存在していたことが知られている。

しかし，フローベールの完全な創作による人物が、そのなかに２人登場するのは興味深い。プランの前段階であるカルネのなかで聖書上の人物や歴史的人物は大きく取り扱われているが，マナエイとファニュエルという創造上の人物のほうは存在が想定されていない。彼らは『ヘロディアス』の初期の構想段階では意味を持たなかったにもかかわらず，最終稿に近づくにつれ、必要不可欠な人物となっていったのである。フローベールは『ヘロディアス』について「民族の問題がすべてを支配していたのです」[2]と書簡で語っており，マナエイとファニュエルはそれぞれ異なる民族に属している。彼らはなぜ，そしてどのように登場人物としての地位を確立し，既存の人物たちと混在するほどの実在性を獲得するにいたったのだろうか。

1　民族的特徴

まず，民族のなかでもっとも記述の多い《les Samaritains》と《les Esséniens》の相異性が創作過程においてどのように定義されていったかを見てみよう[3]。『聖書』のなかの，ユダヤ人と交際がないサマリア人の女がキリストに水を与えるというエピソードや[4]，強盗にあって怪我をした男をレビ人は無視したがサマリア人は助けたというエピソードから[5]，《les Samaritains》には「よきサマリア人」というイメージが付与されている。歴史的には当時彼らは古代イスラエル北王国に要塞都市を築いたが，のちにユダヤ人ヨハネ・ヒルカン王によって信仰の中心のゲリジム山の神殿を破壊され，ユダヤ人と激しく対立していた[6]。

いっぽう，《les Esséniens》のほうはパリサイ派，サドカイ派とともにエッセネ派として主なユダヤの宗派を形成しており，修道院的な共同生活を営んでいた。この宗団の特徴としては独身主義，財産の放棄，律法・預言者についての熱心な学習，位階序列に従った共同の聖餐などがあり，白い服を着て厳しい戒律のもとに生きていた。彼らはユダヤ人で《les Samaritains》とは敵対関係にもあった[7]。

これらの民族あるいは宗派の名前はカルネにはもちろん書かれていない。だが次段階のノートでは1ページ目のフォリオf.2(7443r).のなかに,《Les Esséniens》という言葉が下線をともなって書きとめられている。《Les Esséniens éaient groupés dans le pays de Jean, <prés> sur le bord oriental de la mer Morte. Les Esséniens avaient donné au baptême plus d'extension. Les foules entouraient Jean, on croyait que c'était Élie ressuscité. [⋯] d'autres tenaient Jean p^{r} le Messie》(I, 7)[8]. フローベールの草稿では下線は重要な人物を強調するために引かれると考えられている[9]。彼らはヨカナンと同国人であり広く洗礼を行い,彼をエリヤさらにはメシアだと信じている。《les Esséniens》という民族はこの物語のなかの多数の反キリスト教の民族のなかでヨカナンの絶対的な擁護者として設定されていたのである。《les Samaritains》の記述は次のf.3(743v).にはじめて現われる。《Les Samaritains firent des veaux d'or.<qu> [⋯] . La colombe est sacrée. c'est un péché que d'en blesser une》(I, 8).彼らにかんしては《les Esséniens》とは異なりキリスト教との接点がまったくない事項しか書きとめられていない。ここでは「金の牡牛」を作ったり,鳩を神聖視したりというエキゾティスム的な側面が強調されている。彼らは変わった慣習をもつあまり宗教性のない民族として選択されたことがわかる。

だが,次第に《les Esséniens》の記述は宗教との関係から離脱していく[10]。f.64(697r).では次のようにノートが取られている。

> Esséniens: haine de l'huile, être flétri par le hâle est un honneur forts dans la connaissance des
> simples α des animaux.
> s'abstiennent de coucher devant leurs frères ou vers la droite éprouvaient les femmes avant de les épouser.
> pendant le sabbat ne quittent pas le lit—
> zélateur féroce (I, 77)

油を憎むという行為は非常に迷信的であるが,「薬草や動物の知識を重んじる」という文章は知性の高さを示し,そこに彼らの二重性あるいは矛盾が見てとれる。そして結婚前に女性を試せるというエロチックな面もフローベールにとって興味あることとしてメモされていた[11]。このような表現は彼らの人間性を強調しており,自らの宗教に従順であるという事実よりも奇妙な習慣を示すものとなっている。反対に,《les Samaritains》は宗教的要素が濃厚になってくる。f.70(680r).では《Les Samaritains offrirent de se joindre à eux p^{r} rebâtir le temple ↑ *en commun* α furent repoussés. [⋯] Pas de résurrection. l'homme ne revient pas du sépucre》(I, 83)と彼らの望みである寺院建設はユダヤ人から反対され,彼らがキリスト教で重要な「再生」を信じることを拒んでいることが書かれている。《les Samaritains》はここでは純粋にキリスト教に反する存在として認識されているのである。

プランの段階になると,たんなる習慣や宗教にかんする記述は少なくなり,物語と直接的に関連をもつようになる。f.90(751v).では《Antipas protège les Esséniens, comme avait fait H. le g^{d}. car ils ne sont pas dangereux》(I, 111)とヘロドが《les Esséniens》を保護する理由はヘロド大王もそうしたからだと,ヘロドのきわめて受動的な彼らへの関心の動機が記されている。彼らの特徴は「危険ではない」つまり政治的野心を持たないという点にのみ集約されるにいたる。また《les Samaritains》にかんしては《(H le g^{d} [⋯] rétablit Samarie [⋯] Hérode le g^{d} tue Hyrcan》(f.90(756r). I, 112)と記述されている。ゲリジム山の神殿を破壊したヒルカン王を殺害してくれたヘロド大王に《les

Samaritains》が敬意を持つのは当然であり，その結果彼らは息子のヘロドにも自然に仕えるようになったのだ。要するにプランでは，ヘロド大王から息子ヘロドへと受け継がれた登場人物への具体的関与が2つの民族の個性として重視されているのである。

草稿になると，民族の性質はさらに内面的な側面を見せる。《les Samaritains》にかんしてはf.167(746r)で《Une haine nationale, entre les Juifs α les Samaritains ↓ ~~*à demi juifs convertis tard*~~ ↑ *Les Samaritains convertis tard. ils avaient subi leur oppression, leur mépris*[1]. exclus de la communion ‖ reli》(II, 14)と書かれ，ユダヤ民族への近親憎悪が述べられている。半分はユダヤ人でありながら無理に改宗させられ，ユダヤ人の迫害や軽蔑を一身に受けるからこそ憎しみも増大するのだ。それゆえに《les Samaritains》のユダヤ人への憎悪の深さはいかなるものも覆えすことが不可能であろうし，絶対的ともいえることが理解される。反対に《les Esséniens》の記述は世俗性からますます離れていく。f.225(640v) では《Leur éloignement ↑ *déachemt* du monde les rendait pacifiques ‖ ~~et~~ souvent ~~d'eux mêmes~~ ↑ ~~*leurs discours avaient*~~ ↓ *ils avaient* calmaient/*é* ~~leur~~ ↑ *le* peuple》(II, 120)と，彼らの言葉は人々の怒りや悲しみを静め，彼ら自身も争いを好まず平静に生きることを望んでいることが示されている。彼らは人間の現実から離れた場に位置し世界の平穏さをひたすら希求している。このように草稿では民族の問題は感情を巡る観点へと集約されているのである。

そして最終稿では，その記述はそれぞれ一つずつにまとめられる結果となっている。《les Samaritains》については《Leur temple de Garizzim, désigné par Moïse pour être le centre d'Israêl, n'existait plus depuis le roi Hyrcan, - et celui de Jérusalem les mettait dans la fureur d'un outrage et d'une injustice permanente》[12)]と書かれている。ここで注目すべきは固有名詞の多さであろう。二行程度の文章のなかに５つもの場所や人物の名前が見られる。固有名詞は一般的に認知されてはじめて意味をもつ。そのことを考慮にいれると，固有名詞からなる《les Samaritains》の特徴は歴史の流れを辿ることによってはじめて明確になることがわかる。最終稿では彼らの信じる宗教が過去にいかに否定されたかが客観的に表現されており，その簡潔な文章はプランや草稿の内容も潜在的に含んでいるのである。そして《les Esséniens》は，《la soumission des Esséniens aux rois. On respectait ces hommes pauvres, indomptables par les supplices, vêtus de lin, et qui lisaient l'avenir dans les étoiles》[13)]と記述されている。彼らは《pauvres》という言葉からも判断できるように決して権力自体を希求しているわけではない。その存在価値は草稿でのように民衆の平和を一方的に望むだけでなく，人々からも尊敬されているという相互性にあることが示されている。この文章のなかで《Esséniens》以外はまったく固有名詞が使われていないことは，まさしく彼らが歴史から超越した存在であることを暗示している。

このように，生成過程を経るにしたがって《les Esséniens》と《les Samaritains》という２つの民族の特色はフローベールによって選択され，しだいに物語と関連を深めつつ、最終稿ではきわめて対照的に描かれるにいたる。《les Samaritains》は，最初その習慣が重視されていたが，次第に宗教を包括した歴史のなかに深く穿たれ，憎悪の呪縛から解放されることのない現世的な民族へ変わっていく。だが《les Esséniens》はノートでは宗教的特徴が重視されていたにもかかわらず，徐々にその宗教性も歴史，感情の側面も希薄になっていき現実を超越した存在にまで変貌していったのである。

2　虚構の人物の交差

次に，以上のような民族からどのように虚構の人物が生まれてくるかを見てみよう。その創造は決して簡単なものではなく，生成過程をたどっていくとある特徴的な現象が幾度となく出現するのに気づく。プランの最後から２番目のf.161(704r).の「レジュメ」と題された紙には次のように記されている。

Machaerous
[…] Le Samaritain reçoit l'ordre de tenir Jean bien serré. […] <Mine de> l/L'essénien se montre. […]
L'Essénien parle p[r] Jean. Antipas se tait. <consent α le délivrera.> […]
II. […] —Prédiction de l'*e/ Ess*énien […]
III. […] Salomé — danse — Sa requête. La peur du bourreau — On apporte la tête. […] Conversion subite de l'Essénien. — Il explique || le mythe. (I, 225-226)

このレジュメで登場する人物は彼ら以外では「ヘロド＝アンティアパス」が４回「ヘロディアス」が３回，「ジャン=ヨカナン」が６回，「ヴィテリウス」が５回，「サロメ」が１回出てくるのみである。そのような状況で《Le Samaritain》が１回，《L'Essénien》が３回も登場するのは彼らの役割の重要さを物語っているといえるだろう。ここでは彼らはまだ名前をもたず，民族や宗派から派生した《L'Essénien》や《le Samaritain》と呼ばれている。それはつまり彼らが必然的にその民族の特徴を潜在的にすべてもっていることを暗示している。

このプランの最終段階では登場回数から見て，《L'Essénien》のほうが《le Samaritain》よりも果たすべき役割が大きいことがわかる。１章で《le Samaritain》は「ジャンを厳しく監視する命令を受けた」としか書かれていないのに対して，《L'Essénien》は風貌や登場の場面まで書き込まれている。さらにヘロドにヨカナンの解放を要求したり，２章では彼の予言，３章では「突然の改宗」について述べられている。また，ヨカナンの死に《L'Essénien》は関係しているが，《le Samaritain》は第１章で登場する以外に接触を持っていないことが見てとれる。

しかし，最終稿を見ると２人の登場の割合は異なってきている。「突然の改宗」は消滅し，ファニュエルよりもマナエイの風貌のほうが詳しく語られるようになる。さらに，上記のプランの第３章ではサロメのヨカナンの首の要求のあと「首切り人の恐怖」という文章があげられ「人が首を持ってくる」と記されている。最終稿では，その行為者の特定されない人物《on》は，《le Samaritain》のマナエイなのである。このように最終稿では《le Samaritain》のほうが《L'Essénien》よりもヨカナンの死と直接的に関係しており，プランとの逆転現象が起きている。つまり，プラン段階での２人の立場は生成過程のなかで交差し，最終稿の２人の立場へと変化したのである。

以上のような交差はたんに役割だけではなく名前においても見られる。『ヘロディアス』では，聖書上の人物たちでも名前の読み方が生成過程でしばしば変わっている。とくにヨカナンの綴りは書簡やカルネ，ノート，プランではフランス語の《Jean Baptiste》，草稿ではギリシャ語に近い《Ioakanam》[14)]そして最終稿では《Iaokanann》と確定するまで時間がかかっている。それは文章のリズムやイメージへのフローベール独特のこだわりからきており，当然創作上の人物の名前も熟考されたのちにつけられたと推測できる。

まずわれわれの注意をひくのは彼らが名づけられていく過程であろう。名前の重要性は，与え

られてはじめて，彼らが民族に従属した存在から個人としての自律した存在へと変貌したことを示す点にある。まずカルネ16のF°48Cに《Noms propres d'homme : M'annaï, Wahballath, Elabel, Belaqab》[15]と男性固有名詞のメモが残されているが，そのなかの《M'annaï》という名はあきらかに《le Samaritain》の「マナエイ」《Mannaei》に近い。次にノートを見るとf.64(697r).で《M'annaï》に近い名が登場人物に与えられている。《Un Essénien Manahem avait prédit à Hérode qu'il serait roi》(I, 77)．奇妙なことに《Manahem》は《l'Essénien》の名として最初につけられたのである。だが，彼の名前はその後ノートではしばらく使用されず，《l'Essénien》とだけ書かれるにとどまる。いっぽう《le Samaritain》のほうは同じ時点では名づけられず，《Le Samaritain》と記されるのみであった。

プランの段階に入ると《Manahem》は《l'Essénien》の名として断続的に使われる。だが，f.99(744v)では左余白にいくつかの固有名が上げられ，そのなかに《Phanuël = face de Dieu le nom du pastèque》(I, 125)という文章が見られる。「ファニュエル」とは最終稿の《l'Essénien》の名に使用されることになるがここではまだ結びつけられていない。そしてその直後のf.104(750v et 752r).では《<Amasaï =il entre> Amasaï <C'est un Samaritain, pareil à une momie> (I, 133)と書かれており，はじめて《le Samaritain》の名が現われている。興味深いことは，《Amasaï》はいったん記されると《le Samaritain》の名として決定されその後変更されることはない。だが，《l'Essénien》の名は《Amasaï》の名の記述後もf.115(710r).に見られるように《Mosallam》と変化し[16]，それでもやはり決定的にはならず《l'Essénien》という言葉へとすぐに戻っていく。やがて，f.123(729r).にいたると《le Samaritain》を指すのに，《<Amasaï > ↑ *Mn'aï* se présente》(I, 166)と《Amasaï》と《Mn'aï》が平行してあらわれ，次のf.124(727r).では《<M'naï> ↑ *M'annaï* se présente》(I, 167)と最終稿の《Mannaëi》に近い名前になる。さらに《M'annaï》が書かれるとほぼ同時に，f.125(732r).にあるように《un Essénien (Phanuel, =face de Dieu)》(I, 170)と《l'Essénien》の名が最終稿と同じ《Phanuel》に決定され，その後変更されることはない。

つまり，最初《l'Essenien》の名であった《Manahem》は次第に《le Samaritain》の名《Mannaëi》へと変化し，《l'Essénien》の名は全く音声の異なる《Phanuel》になったのである。この名前の変遷は，プランのレジュメで《l'Essénien》が《le Samaritain》よりも絶対的に重要だと考えられていたにもかかわらず最終稿では変化した事実にまさに対応している。つまり，民族的要素が強かった《l'Essénien》や《le Samaritain》という人物たちは，名前の交差にともなって，さらに明確なイメージをもつように変貌したのである。

さらに，交差という現象はたんに登場回数や名前にとどまらない。『ヘロディアス』はヨカナンの殺害がテーマだが，それゆえに彼が果たしてエリヤなのかという問いが常に争点となっている。まず，プランf.101(725r).ではヘロドが《le Samaritain》に地下牢のヨカナンの様子を聞き不安に思い次のように質問する。《*<est-ce> que tu crois qu'il est prophète*》(I, 129)? 加えて余白に《Ant. rêve au Messie, au libérateur. au fond, il aurait voulu l'indépendance d'Israël》(I, 129)と書かれている。ヘロドはヨカナンがメシアかあるいはその到来を告げる預言者かを《le Samaritain》へ尋ねたのだ[17]。なぜなら，ヘロドはヨカナンに理由もなく好意をもっているのではなく，ヨカナンこそがイスラエルの独立を可能にする存在かもしれないという，領主としてのきわめて当然な政治的な意図を抱いていたからである。ここでは《le Samaritain》はその問いにたいしてはっきりと答えることはできないがヘロドの運命にかかわる不安を分かち合う役割を負っているのだ。

だが，同様の質問は《le Samaritain》のみに発せられるだけではない。その後プランf.105(730r).

では《est-ce que tu y crois, au Messie?- || - Non, il n'est pas possible avant la révolution de la planète de Saturne - crois-tu qu'il soit || Elie? Je n'en sais ↑L'Essénien n'en sais rien》(I, 136)とヘロドは《l'Essénien》に尋ねているのだ。ヘロドの問いに,《l'Essénien》は「土星の公転の前には不可能だ」と答え，さらにジャンはメシアだと思うかの問いには，わからないと答える。結局ヘロドが一番知りたいことについて,《l'Essénien》の答えは曖昧でありなんら決定的な意味をもたない。さらに発話者が明確に記されず，会話の記号である《》もひとつしか用いられていない。つまり,《l'Essénien》がヘロドの対話者であるにもかかわらず，まるで上記の会話はヘロドの独白のようにも考えられるのである。ここでは,《l'Essénien》は《le Samaritain》とまったく同等の役割しか果たしていないと考えられる。

そしてプランf.116(714v)(I, 154-155)になるとヘロドから《le Samaritain》への上記の問いは消滅してしまう[18]。いっぽう，次のプランf.118(711r)(I, 158)のヘロドと《l'Essénien》の会合の場面では，やはり同じ質問が問われるのである。ようするに，ヨカナンがメシアかエリヤではないかという事実を確認するために，最初は《le Samaritain》が選択されたが，しだいにその役割は《l'Essénien》と混合され，最後には《l'Essénien》へと移行したのである。その結果，ファニュエルは草稿f.217(556v) に書かれているように曖昧さから脱する。《 ~~*que je n'entende pas toujours ce qu'il dit*~~ || ~~je sais qu'en~~ ↑en lui réside une force divine》(II, 105).ここでは,《l'Essénien》はヨカナンの言葉を完全には理解できないまでも神の力を持つと断言するにいたるのである。そして言葉は《l'Essénien》が語るのみでヘロドは一言も口に出さない。ヘロドは徹底的に受け身であり,《l'Essénien》の言葉を聞き不安に思う以外疑問も反論をすることもない。

要するに,《le Samaritain》は初めヘロドから考えを求められるというようにヨカナンの神秘性にかかわる存在であったが，草稿が進むにつれ徹底的に離脱していき彼の首を切る役割を果たすにいたるのである。それに反して,《l'Essénien》はヨカナンの存在意義にたいして最初は曖昧な考えしか抱いていなかったが，それは次第に確信へと変っていき最後はヨカナンを神の使いだとを認めるようになる。このように彼らの人物像は登場場面，名前，精神面における交差を繰り返すことによって，重層化され形成されていったということができるだろう。

3　個性の確立

しかし，ファニュエルとマナエイは交差のみで絶対的自己をもつにいたったわけではない。なによりも創作上の人物の確定を考える時，彼らの職業の特殊性は無視できない。まず占星術は，『ヘロディアス』のなかで非常に重要な要素となっている。なぜなら，ヘロドとヘロディアスの未来，ヨカナンの死はすべて占星術によってヘロドに事前に知らされるからである。そして，この占星術についての記述はカルネのなかにすでに見いだされる。カルネＯは，オリジナルのメモ帳ではなく近代的な製本によって閉じられており，日付も記されていないため書かれた時期を正確に把握できない。それはノルマンディーへの小旅行をした後,『ヘロディアス』の計画を考えるために『純な心』の草稿執筆を中断した1876年の４月の終わりか,『ヘロディアス』のプランをたてはじめる前の1876年の９月か10月に書かれたと推測される。カルネＯのF°10では《*Chaldo-syrien*》という項目の下に《*Kimmut* le dieu de la Constellation du Serpent ou plutôt des Pléiades》[19]というメモが見られる。天文学はカルディアの科学であり，占星術はバビロンの宗教でもある。それは同時にユダヤ人にとって敵，捕虜あるいは国外追放の象徴ともなっている[20]。ほかのカルネには天文

学および占星術の記述は見られないが，キリストの生誕が星によって明らかになることを考慮すると，天文学のメモはファニュエル創造の根本的理由の一つだと考えられるであろう。

さらにプランの１枚目f.87(708r).の余白に《l'Essénien lui prédit que qq'un doit mourir aujourd'hui à Macherous》(I, 105-106)と書かれている。フローベールの草稿において余白は特別な意味をもつ。彼は草稿執筆のとき大判の紙を使用し左側に広い余白を残しているのみならず，そのために折り目もつけており，はじめから余白を考慮に入れていた[21]。その後重要な要素として本文に組み込まれ描写の発端になることが多い余白の文章は，草稿の本文の一部と考えることができる。じっさいf88(722r).では本文に《 il fermer les yeux. Montrer qu'il est astrologue》と書かれ，ここではじめて《l'Essénien》が「占星学者」としてはっきり規定されているのである[22]。一方「首切り人」という職業はカルネのなかにはメモされておらず，次の段階のノートにも記されていない。だが，プランの１枚目のフォリオf.87(708r).になると，余白に小さな字で内容とは関係なく《avoir montré le Samaritain = bourreau 》(I, 106) と記述されている。つまり，《l'Essenien》が余白で「占星術者」と記されると同時に《le Samaritain》の職業も「首切り人」として余白で想定されていたのである。空間的には《l'Essénien》は星で運命を読むという天の力に属し，《le Samaritain》は支配者の命令によって他者の肉体的死をもたらすという地上の力に属している。また時間的には《l'Essénien》は未来に属する人物であり，《le Samaritain》は現在にしか属していないというように，職業という点であきらかに対立が強調されている。

また外観，肉体の特徴は個人をより限定すると考えられる。《le Samaritain》はプランf.104(750v et 752r).で《*Il est* nu, sauf un calçon ［…］ Pomettes osseuses - yeux éteintes. <ses>les dents brillent ↑ *dans son visage de momie*》(I, 133)と描写されている。彼はほとんど裸であり，生を最も象徴する目は輝きが消え，強調されているのは骨や歯という肉体が滅びても残るものばかりとなっている。彼の特徴はまさに「ミイラ」という言葉につきるであろう。そこから感情のない即物的な肉体の死のイメージが《le Samaritain》にはついてまわるのである。だが草稿になると外観の描写に変化が現われる。f.166(745r)では《Ses cheveux relevés ‖ par une peine, ↑ g^{ds} *agneaux d'argent aux oreilles..* ↑ *sur sa poitrine un petit tatouage* ［…］ l'air brut et exalté》(II, 13)と金の耳輪をし胸には刺青というように装身具で飾られ，死者の肉体の印象は全く消失し，激しい感情の起伏さえ持っている。彼はその後も草稿でユダヤ人への呪いの言葉を口にする時《*il halète comme à l'approshe d'une volupté*》(II, 34)と，死よりもむしろ生命を感じさせるように描かれている[23]。しかし，最終稿では《Il était très grand, vieux décharné ［…］ tout son corps ayant la souplesse d'un singe, et sa figure l'impassabilité d'une momie》[24]と老人で頬もこけ，猿を思わせる容姿に描かれている。ここでは草稿でのすべての装身具は消え去りきらびやかな雰囲気はなくなっており，もはや彼は興奮も欲望も持たず無感動である。そして「猿」と言う言葉で暗示されているように人間的というより本能的で野蛮な存在に変化している。彼は「老人」と「ミイラ」という単語によって，まさにプランに見られた死と草稿に見られた生の狭間に漂う動物的な干からびた肉体そのものに化しているのである。

いっぽう《l'Essénien》の外観は《le Samaritain》とは対照的である。草稿のf.195(549r)では《un homme en robe blanche, ↑ *nu pieds, un bâton à la main*》(II, 66)と記述され，この描写は最終稿まで一貫している。それは《l'Essénien》の肉体の希薄さを暗示していると考えられる。《le Samaritain》とは異なって，彼の身体は外界にさらされてはおらず，無を意味するとも思われる白い服に覆われている。そして手に持っているのは《le Samaritain》のように武器の剣ではなく杖であり，この杖さえも最終稿では消去される。彼はまさに精神のみで生きているのだ。このように彼らの外観

はそれぞれ肉体と精神の象徴へと分化したのである。しかも《le Samaritain》の外観は試行錯誤の末，《l'Essénien》のほうは迷うことなく決定されるというように生成過程さえ対照的であった。

それでは，職業や外観の対立をへて，彼らの内面性はどのように形成されたのであろうか。それはなによりも他者との関係を通してであったと考えられる。じじつ彼らと支配者であるヘロドは非常に深く結びついている。まず，《le Samaritain》とヘロドの関係を見てみよう。プランf.104(750v et 752r)を読むと《<Son ‖ dévouement à Antipas dont la mère Maltacé était une samaritaine》(I, 133)と記述されている。ヘロドの母はサマリア人であったことから，《le Samaritain》のヘロドへの忠誠は民族の血に根づいていたということがわかる。草稿では彼らの関係はさらに密接になり，f.167(746r)には「乳兄弟」であったさえ書かれている[25)]。彼らは単なる主従関係にとどまらず，より私的な部分で結びついていたのである。じっさい，マナエイがユダヤ人を呪う時ヘロド自身も次のように感じる。f.178(541v)《~~le laissa dire ses malédictions,~~ ↑ ~~*se réjouissait*~~ *d'entendre* ↑ *souraiat* ~~souhaitait~~ [···] *souhaitait qu'elles* ↓ *se réalisassent* α cependant ↑ *mais* n'eut pas osé les dire.》(II, 34).彼はマナエイの呪いの言葉を聞くのを喜び，口には出さないがその実現さえも望んでいる。このように，草稿の初期段階までは彼らの関係には乳兄弟という肉体的側面とユダヤ人への呪いの実現という精神的側面での同一性が認められる。ヨカナンの監視を命じたマナエイへヘロドが《*je me fie à toi*》と信頼を語ることから見ても，彼らが同化していたことがわかる。

だが，彼らの蜜月は長くは続かない。ヘロドやヘロディアスの前でマナエイはファニュエルを一目見るなり殺そうととびかかるが，その場面は草稿f.200(563v)では次のように描写されている。《Hérodias l'avait vu ↑ *et ~~lui~~ cria* — tue-le! tue-le! ~~Non~~! ~~dit~~ ↑ — *Arrête*》*dit* le tétrarque — Mannaëi ~~s'arrêta~~ ↑ ~~*devint*~~ ↓ *devint immobile* — ↓ α *le regardait.* — étonné ↑ ~~*stu*~~ ↑ ~~*par*~~ ~~les ordres~~ ‖ contradictoires ~~d'Antipas~~》(II, 75). ヘロディアスはマナエイにファニュエルを殺すように命令するが，ヘロドは彼を止める。それにたいしてマナエイは驚いてヘロドをみつめるのである[26)]。彼にとってはヘロドの命令は「矛盾」していたのだ。ヘロディアスとマナエイにとってはファニュエルはユダヤ人でありヨカナンの味方であるからこそ殺さなければならない相手である。そして，確かに草稿の初期段階ではヘロドもマナエイのユダヤ人への呪いの実現を願っていたのである。マナエイの驚きはヘロドとの同化を信じきっていたからこそ生じたのだといえる。ヘロドの禁止はマナエイにとっては自分にたいする裏切りであり衝撃だったのだ。そして，最終稿になるとマナエイの驚きは完全に消滅する。《Hérodias lui cria : — 《Tue-le!》 — 《Arrête》 dit le Tétrarque, Il devint immobile, l'autre aussi 》[27)].マナエイはヘロドの禁止にたいしても命令に従うだけで，いかなる感情の表明もせずただ黙って引き下がる。ここでは，もはやヘロドとマナエイの同一感はまったく問題になっていない。最終稿では彼らが同じ民族である事実や「乳兄弟」という言葉もいっさい省かれ，ヘロドがマナエイに「信頼している」と打ち明けることもなくなる。そして，マナエイのユダヤ人への呪いにもヘロドはいかなる関心ももたないのである。それは，同時にマナエイがヘロドから独立し別の個性をもつ人物へと変貌したことを示している。

ファニュエルの場合は，草稿でマナエイがファニュエルを殺すなというヘロドの命令に驚きを隠せなかったと書かれていたフォリオのあとのf.218(573v)で，ヘロドにたいして次のような態度をとったことが記されている。

~~Mais le~~ ~~un homme~~ ↓ ~~*l'essénien l'avait suivi*~~ [···]

Antipas ↑ *il* se retourna brutal brusquement ↑ *brusquement.* ↓ *C'était Phanuel*

— Ah. encore! ~~tu viens p. lui, n'est ce pas?~~ [⋯]

— 《Et p. toi, 》 | ~~repris l'essénien d'un air doucement intrépide~~. J'ai à ‖ t'apprendre une chose considérable ~~qui t'intéresse~~》

Le tétrarque tout ~~en continuant à marcher/*ant*~~ ↑ ~~*dit qu'il ne voulait pas*~~ ~~disait qu'il ne voulait point~~ ↑ *lui faisait signe de se retirer*

~~Il n'en tint compte~~ ~~Sans avoir peur de lui~~ ↑ *Il ~~n'en tint compte~~* ↑ *n'obéit pas* — α entra [⋯] dans un appartemt obscur. (II, 108)

ファニュエルはマナエイとともにいったん引き下がるが，そのあとヘロドが一人になり自分の部屋に戻ろうとした時あとをついて行く。気配を感じ突然振り向くというヘロドの行為は，ファニュエルの行動が意図に反していたことを示している。それゆえに話したいという願いにたいするヘロドの拒絶はファニュエルへの不信感の表われであると考えられる。ファニュエルとマナエイの違いは，後者はヘロドの命令に忠実であるが前者は無視する点にある。ファニュエルはヘロドの命令に背き躊躇なく部屋へと入っていくが，その時の彼の態度は「気にしなかった，恐れなかった，気にしなかった，従わなかった」と強調されている。この場面が草稿で繰り返し書かれたという事実は，ファニュエルのヘロドへの非従属性を強調するためだと判断できる。

だが，最終稿ではファニュエルの反抗的な行動は消滅し簡潔になっている。《Phanuel surgit à l'angle d'un couloir. — 《Ah! encore? Tu viens pour Iaokanann, sans doute? — 《Et pour toi! j'ai à t 'apprendre une chose considérable. 》Et, sans quitter Antipas, il pénétra derrière lui dans un appartement obscur 》[28]. まず彼はヘロドの後方ではなく前方に現われる。この変化はファニュエルの行為がヘロドにとってある程度自然であったことを示している。じっさいヘロドは問題なくファニュエルに同意し，あたかも当然のように２人は部屋へと連れだって入っていき，ヨカナンについて互いに率直に話し合うのである。要するに，マナエイは最初民族的，家族的側面においてもヘロドの分身のような存在であったが徐々に分離していき，共感が消滅した時点でヘロドから独立する。反対にファニュエルはヘロドと草稿では相異，反発するが，最終稿になると緊密で対等な場に立つようになる。ヘロドを媒介とすることによってマナエイとファニュエルは対照的な過程を経て自律していくのである

しかし，彼らの特異性は他の登場人物をとおして成立するだけではない。f.133(712r).を見ると《L'Essénien insiste. [⋯] Cette nuit à la faveur du festin, Jean pourrait s'échaper, si Ant ‖ écartait le Samaritain》(I,183)と記されている。《l'Essénien》はもしヘロドが《le Samaritain》を遠ざけるならヨカナンは逃げられるだろうと固執する。プランから草稿にかけてこの提案を何度もファニュエルは持ちかけている[29]。ここではヨカナンの逃亡という重要な問題にかんしてもはやヘロドは中心的人物ではない。その可能性は《le Samaritain》がヨカナンを監視しているか否かにかかっているとファニュエルは主張しているのだ。ヨカナンの監禁はファニュエルとマナエイの対立から生じているとさえ考えられる。だが，草稿の後期段階さらに最終稿ではファニュエルの提案は次のような言葉のみになる。《Il faut le délivrer》[30].彼は具体的な逃亡方法をなにも示さず，ヨカナンを放免するようにと繰り返すだけであり，マナエイという名前さえ口に出しはしない。

結局，ファニュエルとマナエイはプランや草稿では対立するが，最終的には対立という接点さえ消滅してしまう。そして，彼らの自律性は最終稿の唯一の出会いの場面に集約されることになる。ファニュエルを殺せというヘロディアスの命令がヘロドによって制止されたあと，彼らは次

のように退く。《Puis ils se retirèrent, chacun par un escalier différent, - à reculons, sans se perdre des yeux》[31].目を合わせたまま，別々の階段から引き下がるという行為は，彼らがパラレルな，もはやあらゆる側面において何者とも決して融合することはない存在へと到達したことを証明しているのである。

＊

民族から派生したマナエイとファニュエルの創造は，交差，対立を繰り返しながら，他の登場人物たちあるいは彼ら自身からも相互的に逸脱することによってはじめて成立しえたといえる。なぜなら，『ヘロディアス』はすでに述べたように聖書や歴史上のしかもそれぞれ非常に個性的な人物たちの物語である。そのような既存の強いイメージのなかから新たな人物を創造するためには，関連性の削除こそが必要だったのである。感情やつながりの消失は，他者との距離になる。そしてその距離感こそが彼らの特異性へとつながっていったのだ。またこのエピソード自体も過去に絵画，彫刻，文学の分野で何度も取り上げられており，斬新なものではない。しかし，「平凡さ」《banalité》のなかにある独創性を作品化すること，この考えはフローベールの創作活動の生涯の目的であった。まさに，最初は匿名の人物であったマナエイとファニュエルの存在はその象徴となっている。じじつ，ヨカナンが首を切られたのち，他の登場人物たちの感情はもはやなにも語られはしない。だがファニュエルとマナエイだけは例外である。「首が来た―マナエイは身に浴びる喝采の声に得々と，片腕にその髪の毛をつかんでいる」[32]。「日の昇るころ，かつてヨカナンによって遣わされた２人の男が，待ちかねた返事をたずさえて帰ってきた。２人はそれをファニュエルに伝えた。ファニュエルの心は歓喜に踊った」[33]。彼らはそれぞれ歓喜に満ちあふれているのである。２人はその喜びによって他の登場人物たちを超越し，作品のなかで永遠の生命を授かったかのように見える。そしてこの歓喜はそのままフローベール自身の喜びにも通じているのである。1877年２月15日，彼はジュネット夫人へ次のように書き送る。「昨日午前３時，『ヘロディアス』を写し終えました。〔…〕この冬あれこれと想いをめぐらした２人の好人物に再びとりかかるつもりです。今では彼らをもっと生き生きとした，しかも作りものでないかたちで思い浮かべているのです」[34]。『ヘロディアス』での唯一の創作人物が２人であり，また次の作品の主人公も「２人の好人物」であったことは偶然とはいえないであろう。しかも『ブヴァールとペキュシェ』が『三つの物語』の直前に中断されたままであったことを考慮に入れると，マナエイとファニュエルの創造は確実に次の作品へと受け継がれていったと考えられないだろうか。

註

1）『聖書』の記述にはヴィテリウスとアウルスがヨカナンの首をはねる場に同席していたという記述はなく，彼らの登場はフローベールの創作である。なお，本稿では新約聖書からの引用は日本聖書協会の1954年改訳版によるが，登場人物名の表記にかんしてはピーター・カルヴォコレッシ『聖書人名辞典』(教文館，1998年，佐柳文男訳）にしたがって改変した。ただし「ヘロディア」については，フローベール作品の邦題がすでに定着していることを考慮して「ヘロディアス」とした。

2）1876年６月19日付，ロジェ・デ・ジュネット夫人宛書簡。Gustave FLAUBERT, *Œuvres complètes. Correspondance. Nouvelle édition augmentée, septième série (1873-1876)*, Paris : Louis Conard, 1930, p. 309.

3）生成過程のなかでは，民族や宗派を示す《les Samaritains》,《les Esséniens》と個人を示す《l'Essénien》,《le

Samaritain》がはっきり区別して記されている。しかし日本語に翻訳すると曖昧になるためあえてフランス語で表記することにした。

4）「ヨハネによる福音書」第４章１～30節参照。

5）「ルカによる福音書」第10章29～37節参照。

6）旧約新約聖書大辞典編集委員会編『旧約新約聖書大辞典』（教文館，1989年）519-20頁参照。

7）同上195頁参照

8）草稿のうち，読書ノート，プラン，最終コピー，写本者のコピー原稿はGiovanni BONACORSO et al., *Corpus Flaubertianum. II. Hérodias. Édition diplomatique et génétique des manuscrit. Tome I,* Paris : Nizet, 1991 に，またヘロディアス第１-３章は Giovanni BONACORSO, *Corpus Flaubertianum. II. Hérodias. Édition diplomatique et génétique des manuscrits. Tome II,* Paris : Sicania, 1995 に収められている。本文および注における引用の出典は巻数 I, II とともにページ数を（　）内に示す。なお，草稿内の記号はつぎのことを意味する――

italique = varientes interlinéraires
↑ = variantes en interligne supérieur, 1ère campagne
↑ = variantes en interligne supérieur, 2ème campagne
↑ = variantes en interligne supérieur, 3ème campagne
↑ = variantes en interligne supérieur, 4ème campagne
↓ = variantes en interligne inférieur, 1ère campagne
↓ = variantes en interligne inférieur, 2ème campagne
↓ = variantes en interligne inférieur, 3ème campagne
↵ = ce qui précèdE le cran est en marge
|| = fin de ligne.

9）Voir Almuth GRESILLON, Jean-Louis LEBRAVE, Catherine FUCHS,《Flaubert :《Ruminer Hérodias》du cogitif-visuel au verbal-textuel》in *L'Ecriture et ses doubles,* CNRS, 1991.草稿での下線は場合によって２つの意味をもつことが指摘されている。図式のなかで使われた時は重要性を強調し，文章の語りなかで使われる時はシーンの移り変わりを示している。

10）エッセネ派の宗教感はジャンとは離れて，f.58(663v).の「太陽に向かって祈りを捧げる」(I, 49)やf.61(691v).の「昇る太陽へ祈る。寺院へはあまり行かない」(I, 73)というように次第に太陽信仰が強調され，ついには消失していく。

11）エッセネ派の女性たちは，男性たちの集団住居の壁の外側に野宿をしていた。結婚するメンバーもいたが，妻が妊娠すると共同体の外に住まわせたといわれている。『聖書人名辞典』参照。

12）Gustave FLAUBERT, *Trois Contes.* Texte, sommaire biographique, introduction générale, bibliographie, notes, ultimes corrections, transcriptions, établis par Peter Michael WETHERILL, Paris : Garnier, coll. «Classiques Garnier», 1988, p. 225. 邦文引用は筑摩書房『フローベール全集』(1966年）収載の山田九朗訳によるが，文脈によっては改変をほどこした。

13）*Ibid.*, p.232.

14）他の登場人物たちの名がすべて確定されていた草稿の後半部分であるf.312(596v)でもまだヨカナンの名は《Ioakanam》と記述され，最後まで熟考されていたことがわかる。なお，ギリシャ語では《Iōannēs》と書かれる。

15）Gustave FLAUBERT, *Carnets de Travail,* Édition critique et génétique établie par Pierre-Marc de BIASI;, Balland, 1988, p. 680. カルネには女性も含めてほかに幾つもの名前が書きとめられているが，結局使われたと思われるのは《M'annaï》のみである。

16）f.115(710r).では《- Un essénien <u>Mosallam</u> paraît》(I, 152)と下線付きで書かれている。その後f.117(749v).では《<u>Un Essénien</u> paraît. [···] Regard plein de haine d'H || sur l'Essénien: Mosallam)》(I, 156)というように再び《Un Essénien》と記述されるが《Mosallam》次に変化している。だがその後この名前は使われることはない。

17）f.104(750v et 752r).では《Amasaï répond que Jean ne dit plus rien. il se tient tranquille. ce n'est pas || une raison pr Antipas de se rassurer. Les prophètes sont muets dans la tristesse- ↑ *puis se réveiller* [···] *Jean* a envoyé à Jésus deux hommes 〈pr savoir s'il est le Messie〉》(I,134)というように，ヘロドはヨカナンが預言者であるとほぼ確信を抱いている。彼はマナエイとの会話によって真実まで達しているといえる。

18）ここでは最終稿と同様にヘロドはマナエイにヨカナンは牢でどうしているか聞くだけである。また，ヨカナンが送った２人の男が会いにいく人物，イエスの名前も消失している。つまり，マナエイはエリヤ，メシア，預

言者という神秘性から徹底的に離れていくのである。そして神秘性にかんすることはすべてファニュエルと関連することになる。

19) *Carnets de Travail,* op. cit., p.760.

20) 実際，ファニュエルは第２章で星を読み死者がでることを予言し，第３章の饗宴の場でも星を読むために城壁に沿って歩く場面があることをビアジは指摘している。

21) Voir Almuth GRESILLON, Jean-Louis LEBRAVE, Catherine FUCHS, *op. cit.* フローベールは行間も大きくし，思いついた事を書けるようにしていた。なお，『ヘロディアス』にはおもに青い紙と白い紙が使われた。青い紙は資料の引用などの準備段階のため，白い紙は草稿段階のためであった。

22) エッセネ派のなかには占星術者や夢占い師もいたことは知られている。『聖書人名辞典』参照。

23) 草稿ではマナエイは非常に生き生きと描かれ，感情をむき出しにする。ヴィテリウスがヨカナンの首を切りたがっていることを知って彼は耳まで喜びで笑ったとf. 292(590v) にも書かれている。《Mannaëi ~~avait devinait~~ ↑ savait bien qu'il était question de lui [⋯] il crut que les licteurs allaient le décapiter. - α il souriait de joie jusqu'aux || deux oreilles》. (II, 233)

24) *Trois Contes,* op. cit., p.225.

25) f.167(746r)には，《Car Mannaï était un || Samaritain, [~~comme sa mère Matlacé~~ - ~~frère de lait~~ - ~~dévoument~~》(II, 14)と書かれている。

26) プランf.125でも《- 《Tue-le》 lui crie Hérodias. - Antipas l'en empêche ↑ *l'arréte*. - Le Samaritain <n'y comprend rien> ↑ est étonné 》(I, 170)と記述されている。このマナエイの驚きはプラン，草稿にかけて幾度も現われる。

27) *Trois Contes,* op. cit., p.228.

28) *Ibid.*, p.231.

29) プランf.140(718v).では余白に次のように書かれる。《Parce que le Samaritain le garde - Ant 《va le chercher[d] amène-le》 α il lui donne des instruction p[r] ouvrir la prison <quand il vient; α assiste au festin》(I, 193). 結局，ヘロドは《l'Essénien》の提案を受け入れて《le Samaritain》を饗宴の場に参加させ，その間に牢を開ける指示を出そうとする。しかし，それは次の結果に終わる。プランの本文には《*presque dès le début du festin à* l'oreille d'Antipas, α lui apprend qu'il est impossible de || faire évider Jean. < il y a des gardes romaines autour de son cachot, des sentinelles partout>》(Ibid.)と書かれる。多くのローマ兵や見張りがすでに配置され，ヨカナンの逃亡は不可能になったことを《l'Essénien》はヘロドに耳打ちするのである。

30) *Trois Contes*, op. cit., p.231.

31) *Ibid.*, p.228.

32) *Ibid.*, p.255. f.422(535). でも《*Mannaëi la tenait* [⋯] *par les cneveux* || au bout de son bras, - orgueilleux ↑ *fier* des applaudissements》(II, 443)と，「自慢した」「得意になった」とマナエイの感情が繰り返し書かれている。

33) *Trois Contes*, op. cit., p.256.

34) Gustave FLAUBERT, *Œuvres complètes. Correspondance. Nouvelle édition augmentée, huitième série (1877-1880)*, Paris : Louis Conard, 1930, p. 16.